

## 同窓会誌『松五会の思い出』を読む

酒井 ただよし 董美

筆者は島根県立松江高等学校五期生である。つまり昭和26年(1951)4月に入學し、29年3月に卒業したことになる。全校生約二千人という大規模校であり過ぎた。昭和38年、二つに分かれ松江北高校、松江南高校となり、さらに昭和58年に松江東高校が出来、現在ではこの系統を引く高校は三つになっている。松江西高校はあるが、私立なのでこの系列には入らない。このほど知人から上のような週刊誌大で

48ページの記念誌をもらった。表紙は『松五会の思い出』のタイトル。1976→2021と西暦年号が横に生まれ、「島根県立松江高等学校五期の会」と発行母体名が記されている。イラストは山口はるみさん。扉の詩はペエスケなどのマンガで知られた園山俊二君の詩で飾られている。筆者の知らぬところでのこの会が生まれ、毎年のように会合を持つていたが、一昨年記念誌を出し、お互い高齢になったので全体会を閉じたそうさ。

冊子を読むと、東京在住の卒業生有志によって首都圏の仲間呼びかけ、昭和51年4月25日に東京都勤労福祉会館で初回の同窓会が開かれたとある。41歳という人生で中堅になったころであった。会は毎年のように続けられ、39回までの写真が掲載されている。39回は令和元年10月9日渋谷エクセルホテル東急(東京都渋谷区)が会場だった。

筆者はこの会のあったことを今月初めて知った。東京の有志によって作られた会だったから知らなかったのは仕方がないが、多くの同期生たちの寄稿文を読むと、第二次世界大戦後の貧しい中であって、それなりに高校生活を楽しんでいた当時の思い出が甦って来て懐かしかった。所々に当時の仲間たちの写真も挿入されていて、知った顔も何人か見られる。こんなに若い顔をしていたのかと、歳月の経過をしみじみ実感させられることであった。そして多くの仲間が既に亡くなっているのを改めて思うのである。多分80%は彼岸に旅立ったはずで、生存している者が少数派になってしまっている。

「あとがき」を三東崇宏君(杉並区)が書いているので一部を紹介しておく。年に一度、顔を合わせ過ぎず一刻は、楽しかった。／西川津の木造校舎で繰り広げられる「民族大移動授業」の中で、たまたま仲間になれた者もあったが、生涯の友の多くは、この会で知り合えた。／まぶしくて言葉さえ交わすことのできなかった、お方様とも、席を同じくして話す欲びもあった。／数多くの友は、既に鬼籍に入り、残された者もそれなりに年を重ねてきている。(後略)

毎回の記念写真がカラーで収められているこの冊子を手に出来たのは、実に幸いなことであった。部数を増やしてまだ知らぬ仲間に配布できないものだろうか。そのようなことを思いながら時どきページを繰っている筆者なのである。